

# 266人の新しいチカラが加わる

令和8年2月28日、卒業生266人を新たに迎える入会式が行われた。

冒頭のあいさつで、柴田義弘参与（昭和41年卒、元校長）から在校生として3年、通算20年の教諭生活、校長として2年、合計25年うぐいす坂を往復した思い出話、そして「卒業しばらくは「秋高」のバックボーンがない所で切磋琢磨し、10年後くらいは落ちてきたところ「あいつはどうしてる?」「同期に会ってみたい」というような気持ちが出てくるでしょう。そこで母校とのつながりの橋渡しや支援をするのが同窓会です。これからの活躍を心より祈念しております。」という言葉が送られた。

続いて横手市で弁護士として活躍している近江直人さん（昭和60年卒）から激励の言葉が送られた。自身41年前卒業し、在学中に心に残った言葉は「おのれを修めて世のためつくす」。学び続け、必要とされる場所で責任を引き受けると解釈している。在学中は吹奏楽部に入り、毎日トロンボーンを吹いていた。「音は誠実でなければ響かない、ごまかしはダメです。仲間との共鳴により音が一致した時素晴らしいものとなって伝わる」。

やるなら難しいことに挑戦してみようと考え司法の道を選択した。当時の試験の合格率は2・7%、100人受けて97人が落ちる現実、バイトしながら勉強し4年後合格できた。挫折しなかったこともあったが最後まであきらめなかった。支えてくれた両親には感謝。そして司法修習が終わり横手で開業しようとした。地縁のない土地、不安だったが「おのれを修めて」の言葉を思い出し決心した。現在同地域には4事務所、5人の弁護士がおり様変わりした。思い出深いエピソードとして、2時間かけて訪ねてきてくれた女性の依頼人が「弁護士に会えただけでホッとした」と言ってくれたこと。この地域にいる意味を実感した。

柴田義弘参与

開業は平成7年、インターネット黎明期で、使用していたOSはウィンドウズ95であった。消費者被害の救済案件に

取り組み全国規模で活動を展開しました。

「未来は無数にあります。皆さん、どの場所で誰のためにチカラをつかいたい? 都会、海外、秋田? どこでもいいです。大切なのは逃げずに続けること。続けられる人にだけ景色も変わっていきます。秋高同窓会は『同じ高校を卒業』ということと結ばれています。その絆は強固で、会って同窓とわかれば『私も秋高』という言葉が発せられます。お互いに伝統と校風を共有しているからです。至るところに最前線で活躍している卒業生たちがおります。どうかこのつながりを大切にしてください。質実に自律的に不屈に。皆さんの未来が光り輝くように心からお祈りしております。」

この後、柴田参与から新入会員代表の熊谷彩夏さん（前生徒会副会長）に記念品が贈呈された。熊谷さんから「伝統を引き継ぐという大きな責任を感じております。150周年の節目に入学、この歴史は先輩方の努力や苦労の上に成り立っております。特に着装の自由化については、自主自律の高い志と行動力の偉大さを感じました。この3年は将来大きな糧となることでしょう。この伝統を先輩たちにも引き継いでいかなければならないと思っております。これからも指導・鞭撻のほどよろしく願います。最後に応援団OB会「紫紺の会」のリードで校友会歌を斉唱し式は終了した。



校友会歌斉唱



同窓生代表  
近江直人さん



新会員代表  
熊谷彩夏さん

## 天上天下 TENJO TENGE

文武両道、自主自律が秋高の校訓であり、多くの卒業生がその校風を体現している。同窓生に会うと、不思議とどこか似た気風が感じられることが少なくない。同じ校訓の下に学び、薫陶を受けたからと言えは言い過ぎだが、校訓や校風の影響が毎年12月に開催されている全国高校柔道大会という公式大会を知り、そのユニークな開催趣旨が目をついた。出場校は全国的に知られた進学校が名を連ね、文武両道の本気度を競い合うかのような感さ、漂う。ただ、過去の大会に秋高は見当たらなかった▼スポーツの全国大会をみると、実力差が歴然とすべく、文武両道杯は実に興味深い。もちろん、文武両道を掲げる高校が、いわゆるスポーツ強豪校に果敢に挑むこと自体、醍醐味があって、極めて魅力的であることは言うまでもない▼文武両道があまりにも強調されると、女子生徒が半数近いうえに、サイエンス分野にも強い今日の秋高の実像とは、やや懸け離れてしまいうさである。しかしそんな時には、文武両道と双壁をなす自主自律の校訓を前面に打ち出せる▼時代がどれだけ移り変わっても、男女を問わず、秋高の校訓が在校生、同窓生一人一人に貫かれていくことを望まざるにはいられない。